

## 領域「自然」における定型短詩の教材価値 についての情報力学的考察

佐々木 洋

### A Study on the Role of Short Poetic Forms in the Recognition of the Pattern of "Shizen"

Hiroshi SASAKI

本論で筆者が解明したのは、幼児教育において定型短詩（俳句）が持つ教材としての価値と意義である。それは記憶力や文学的センスや自然の観察力をやしなう面のみにとどまらず、アニミズム的自然観にもとづく直観的情報処理能力を、すでに幼児の段階から意図的に訓練してゆくことを可能にする点にある。

上記の結論を傍証的に支持する言及は、これまでいくつかの異なる分野での論文や随筆などに見うけられた。こうして数多くの異なる分野からの指摘が一致することは、単なる偶然によるものではなく、論理的・実践的必然性によるものであらうと筆者は考えた。そこで科学哲学、情報科学、日本人論、能力開発、論理学などの分野に散見される言及を引用して、ここにひとつのまとまった有力な主張ができることを示した。

またさらに、俳句の17文字の長さは一つのまとまったことを表現伝達する場合に適正な最少単位となっていることを、似た他のいくつかの例の情報量を計算することにより証明した。

### まえがき

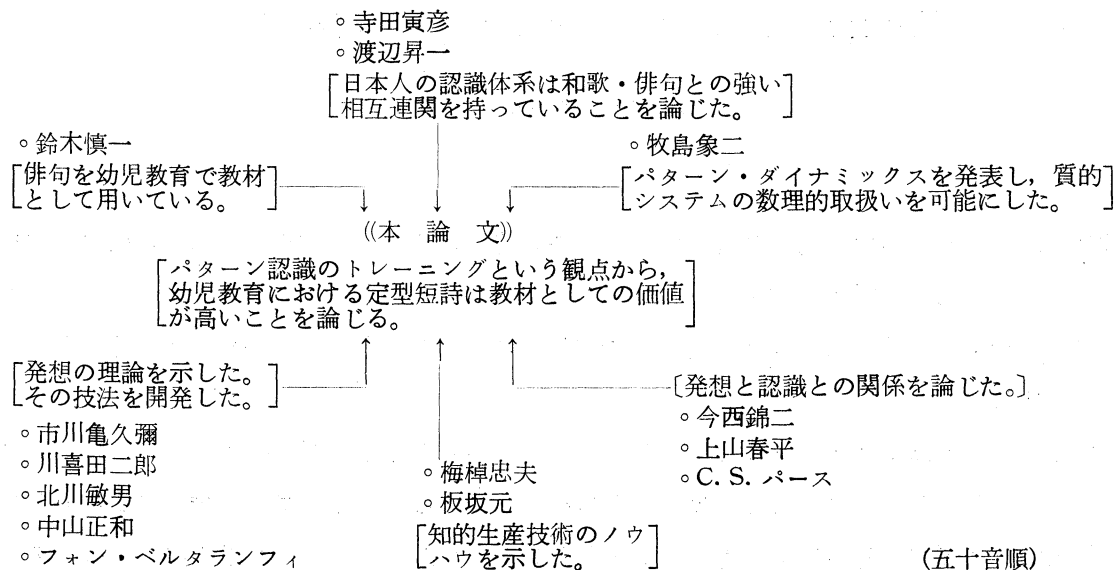
#### ① 「情報」という観点から教材をさがすことの必要性について

- a. 自然科学的自然認識においては「物質」「エネルギー」「情報」という三つの基本概念が柱になる。(1-p. 4) しかし小学校や中学校の理科の内容の中に「物質」と「エネルギー」はあるが、「情報」はない。(2) (3)
- b. 教科教育学の一分野としての社会認識教育学の研究者から、「情報社会において情報にかんする教授はいかにあるべきか。」という問題提起がすでになされている。(4-p. 54)
- c. 情報処理教育の分野からも、「情報処理教育を、コンピュータに関する教育などと限定して考える向きもあるが、今後は広義に情報への人間の対処のしかたの教育であることを銘記すべきであらう。」との指摘がある。(5-p. 233)

- d. 情報の生産、処理、伝達について基礎的な訓練を、小学校・中学校のころから行なうべきであり、学校教育に教科として「情報科」をもうけるべきであるという主旨の提案がある。(6-p. 218)

本論は以上の問題提起を受けて、情報の教育のうちで、とくにその初歩となる段階について、一つの見解を提出したものである。

- ② 本論の基本的アイディアの構成は下記の通りである。



- ③ 「情報」、「パターン」、「情報教育」の定義

- a. 本論では「情報」の定義として、下記のものを採用する。

《情報とは見掛け上均一（局所的でも宜しい）な背景の中に、我々の認識を通して直接または間接に背景と区別できる任意の特長をいう》(7-p. 13)

イ. この定義には「虚情報」も含まれる。「虚情報」という概念までも考慮した定義は他に見られない。

ロ. この定義では、人間以外の生物や鉱物が、外界と情報面で相互作用する場合〔たとえば渡り鳥が星で定位する例(8)〕は除外される。しかし人間の教育現象をあつかう本論ではこの規定で十分である。

- b. 「パターン」と「情報」との関係については、下記の定義を用いる。

《さらに事象、事物の時間的空間的秩序、無秩序をパターンとするならば

「パターンの形成と共役関係にある作用流、それが情報である。』》(9-p. 7)

この定義では、一定機能のシステムが構成体と共役流との二位一体としてとらえられている。

- c. 本論では「情報教育」の概念規定にあたり、「情報科」(6-p. 217)や「情報科学」(5-p. 230)や「社会認識教育学」(4-p. 72)などの定義を参考にして、

「情報教育とは、情報の生成、伝達、処理、保存、利用の訓練、およびそれらの一般的原理を

日常生活や学問分野に適用する見方や考え方と能力をつちかうことを目標とする（自然認識教育や社会認識教育や言語教育にまたがる）教育の一分野である。」と筆者は定義する。

## 本 論

### I. 幼児教育の場で詩が持つ意義について

日本や外国での一例をあげると、記憶力や観察力や文学的センスという面に着眼点がおかれているようである。

《こちらの人は、詩がすぎだ。わたしたちの頭では、なんとなく詩はおとなのもの、とおもってしまうが、モスクワの幼稚園で友子がうけた教育の第一歩は、子どものためのみじかい詩の暗誦だった。リズムカルで、こころよいひびきのスチヒー（詩句）をくりかえしていわせる。ことばのおもしろさとうつくしきとは、やわらかい子どもの心にきざまれる。

あるとき、読書の時間に、友子はお気に入りのコルネイ・チュコフスキーの絵本『蠅のツォコトウーハ』をもっていった。アナスターシア先生がちょうどかぜで休みで、かわりに三年のクラスの男の先生がきていたが、それをみて、「おっ、いい本もってるね。ちょっとかしてごらん」というと、教壇のところにいって、「みんな、よく聞いているんだよ」と、独特の抑揚をつけた声でよみだした。

「ムーハ、ムーハ、ツォコトウーハ

パザローチェンノエ・ブリューハ！」

（蠅、蠅のツォコトウーハ

こがね色にかがやくその腹！）

そして、気持ちよさそうにしまいまでよんでしまったという。わたしに人にきいて、チュコフスキーが自作の詩をいろいろレコードに吹きこんでいるのを買った。その独特の調子はチュコフスキー自身のもだった。百二、三十行もあるこの長い詩を、四つ五つの子どもたちがよくおぼえているという。友子のロシア語の教科書をみていると、いたるところに、詩がちりばめてあった。》  
(10-p. 188~190)

《それなら実際教壇に立って子供に對しどう授業したらよいかといふに、是はその年級々々に應じ、又その教へる人人に依って色々であってよからう。ほんの一例ではあるが、別に教壇で事むつかしく多言を費さなくとも、或は、遠足にでも行って海邊に立って生徒と一しよに先生が遊ぶ時、先生が海に白き浪を見つつ、「春の海ひねもすのたり——かな」と幾遍か繰返し誦むであらうならば、そして子供等も一しよに誦むに至るでもあらうならば、もうそれだけでよく、或は又、野外教授の折にでも、校外の野邊萩叢の下に踞み、「白露をこぼさぬ萩のうねりかな」と歌ふでもあらうならば、そして先生を取巻いて生徒一同がその可愛い眼にその萩その露を見つめるであらうなら

ば、もう別に語義の辯を振ふ必要はない。教室内ででも之に準じたやり方は幾らもある筈。純なのは子供、子供の純は只だその先生の誦む微妙な音楽に依ってちぎにその小さな魂を天地の間にあづけてしまふ。それでいい、それだけでいい。》(11-p. 69~70)

《才能教育の実験教室、幼児学園では、小学校入学まえの幼児たちに将来に必要な基礎となる能力を育てていますが、その一つとして記憶力の訓練をしています。

それは子どもにいちばん親しみやすい一茶の俳句を、毎月一句ずつ覚えさせ、これを繰り返し暗唱させて記憶させます。はじめは十回繰返してもなかなか覚えなかった子どもも、二学期になると二、三回で覚え、三学期には一回でおぼえてしまいます。

句は、観察、歌、遊戯にとり入れやすいように季によって選んでいます。たとえば

一学期 (五十三句)

雪とけるとけると鳩のなく木かな

雪とけて村いっぱいの子どもかな など

二学期 (六十四句)

ふきの葉にぼんと穴あく暑さかな

猫の子がちよいとおさえる木の葉かな など

三学期 (四十五句)

這え笑え二つになるぞけさからは

ふるさとや餅につきこむ春の雪 など

一年間に約百七十句の一茶の句を全員覚えてしまいます。

この記憶の能力は毎日の訓練によって、習得の速度を増し、そして持続時間も伸びていきます。すぐ覚える、覚えたら忘れない。こういう記憶の能力を身につけてやるのです。

一茶の俳句の他にも、美しい詩だとか、あるいは童話のような長い話も紙芝居に組んでやらせていますが、一千字位の話は四、五回で完全に記憶してしまうようです。》(12-p. 105~106)

幼児たちは憶えるだけではなく、自分でも俳句らしきものを作ることができる。

《これも、幼児学園の父兄のかたに聞いた話ですが、家族の人たちと慰安旅行に出かけても、歌なんかちっとも歌わず、俳句とか詩とかを言い出す子どもが多いそうです。句や詩が、いつの間にかからだの中にまで、しみ込んでいるんですね。

注意深いおかあさんの手や、幼児学園の矢野美和先生の手で、書き留めておいていただいた、子どもたちの俳句をちよっとご紹介してみしましょう。

雪の中にポツンと立ってるポストかな

ライラックの下ですずめが遊んでる

おべんとういちごが三つならんでる  
アドバルン窓から子どもがみているよ  
おるすばんどろんこで電話ききにけり

どの句も、わざとらしくない、自然の童心が躍如としていて、しかも、一茶調のやさしい調子が出ていておもしろいですね。》(13-p. 99)

## II. 幼児教育において教材としての俳句が成功するための条件

才能教育の実践者が、俳句を教材としてとりあげて成功した背景には、信州の美しい自然と、そこに住んだことのある一茶のアニミズム的表現にみちた数多くの俳句の存在がある。

俳句をとりあげたきっかけについては、下記のように述べられている。

《ある日、俳句のことが頭の片隅にひらめいたとき、私は、それがかねてから考えていた、記憶力養成の教材として、ぴったりであることに、ハッと気づきました。

なぜ、俳句のことが頭に浮かんだかという、私が信州でずっと暮らして、日ごろから一茶の俳句に親しんでいたからに違いありません。

俳句は、詩の中でいちばん短くまとまった形です。この短詩形の小芸術を覚えさせることは、子どもの心を養い育てるのに役立ちます。そしてその美しさは、子どもの心に生涯記憶させる価値もじゅうぶんにあります。

そして、その、五、七、五の韻律は、幼児にも記憶させやすいところよさを持っているのです。》(13-p. 92)

一茶の作品は、芭蕉や蕉村のそれほどの芸術性を示し得なかったという見解とともに、一茶の俳句のアニミズム的特質が、下記のように研究者によって指摘されている。

《自然物や動物のような非情のものを有情化したということは、そういう非情の世界にあわれを見出したからであろう。しかもその場合、一茶はもはや非情の世界と有情の世界との差別を撤廃しようとしている。いいかえれば、両者は同一性質のものとして取扱われようとする。人間の主体があって、自己や自然物を厳密に対象化するのではなく、主体はいちはやく対象の側に転移されて、主客の自己同一となる。したがって、対象はそれ自体の固有の意味として捉えられるのではなく、主体の偽装として奪いとられることになる。一茶が博大な愛情の持ち主であったために非常の世界を有情の世界にまで救いあげたというのではなく、むしろ素朴なアニミズムとして、動物や自然物まで一茶の仮託の世界の住人となったまでである。その証拠に、これらの非情物はどれもこれもまるで一茶みtainな面がまえになりすましている。》(14-p. 187~188)

### III. 日本民族にとって俳句が持つ多大な価値について、理科系の研究者と文科系の研究者との一致する指摘がある。

自然科学者であり随筆家であった寺田寅彦は、俳句の民族的価値を高く評価している。

《俳句の修業はまた一面においては日本人固有の民族的精神の習得である。本編の初めに述べたように俳句という特異な詩形の内容と形式の中に日本民族の過去の精神生活のほとんど全部がコンデンスされエキストラクトされている。これが外国人に俳句のわからない理由であると同時に日本だけに俳句が存在した存在しなければならなかった理由である。同じ理由から俳句を研究することは日本人を研究することであり、俳句を修業することは日本人らしい日本人になるために必要でないまでも最も有効な教程であり方法である。》(15-p. 288)

言語学者である渡辺昇一は、和歌や俳句の持つ民族的価値と、国語教育におけるそれらの重要性を指摘している。

《その後いろいろ外国のことを勉強するようになってから、日本の和歌の伝統はまことにユニークなものがあり、このユニークさが日本歴史と日本人のユニークさと本質的にかかわっていると考えるようになった。そして古今の絶唱と言われる和歌を覚えていることは日本人としての精神的資格の一つではないかとも、思うようになった。日本語は日本人が太古より客観世界を「日本人の精神的私有財産」化したものの総体であり、そのうちでももっとも価値高い部分は大和言葉で作られた和歌であろう。その和歌のうちでも名歌といわれているものは、「お家重代の宝」ともいえるべきもので、日本人ならばみんなが大切に、子供に伝えていかなければならないものである。

(中略)

それが現在ではどうなっているか。小学校という公教育の場から和歌はいっさい追放されているのである。和歌どころか俳句までもない。あるのは幼稚な自由詩のみである。私は自由詩の批判者ではないし、それどころか、子供のときからそれを作るのが好きであったし、今の子供がそれを読んだり作ったりするのはたいへん結構なことだと思っている。しかしそれだけでは不十分だし片手落ちだと思う。日本語という美しい織物を作り出すには、自由詩とか現代散文というヨコ系だけではいけない。どうしても神代から続いている和歌や、それから出た俳句などタテ系に相当するものが必要である。今の日本の小学校の国語教育は、タテ系なしのヨコ系ばかりで日本語を織り出そうという努力みたいなものと言ってもよいと思う。》(16-p. 202~203)

### IV. 自然認識のしかたは自然を記述する言語によって大きく支配される。

その根拠と実例とを示しておこう。

言語観については唯名論的立場が正しいと、言語社会学者の鈴木孝夫は結論している。

《私も言語学の立場から、いろいろなことばと事物の関係を調べ、また同一の対象がさまざまな言語で、異った名称を持つという問題に取り組んできた結果、今では次のように考えている。

それは、ものという存在が先ずあって、そこにあたかもレッテルを貼るような具合に、ことばが付けられるのではなく、ことばが逆にものをあらしめるという見方である。

また言語が違えば、同一のものが、異った名で呼ばれるといわれるが、名称の違いは、単なるレッテルの相違にすぎないのではなく、異った名称は、程度の差こそあれ、かなりちがったものを、私たちに提示していると考えるべきだというのである。

この第一の問題は、哲学では唯名論と実念論の対立として古くから議論されてきているものである。私は純粹に言語学の立場から、唯名論的な考え方が、言語というもののしくみを正しく捉えているようだという事を述べてみようというわけである。

私の立場を、一口で言えば、「始めにことばありき」ということにつきる。

勿論始めにことばがあると言っても、あたりが空々漠々としていた世界の始めに、ことばだけが、ごろごろしていたという意味ではない。またことばが、ものをあらしめるといっても、ことばだけがいろいろな事物を、まるで鶏が卵を生むように作り出すということでもない。ことばがものをあらしめるということは、世界の断片を、私たちが、ものとか性質として認識できるのは、ことばによってであり、ことばがなければ、犬も猫も区別できない筈だというのである。

ことばが、このように、私たちの世界認識の手がかりであり、唯一の窓口であるならば、ことばの構造やしくみが違えば、認識される対象も当然ある程度変化せざるを得ない。

なぜならば、以下に詳しく説明するように、ことばは、私たちが素材としての世界を整理して把握する時に、どの部分、どの性質に認識の焦点を置くべきかを規定するしかけに他ならないからである。》(17-p. 29~31)

日本人が夕日をあびた鶴を美しいとみたり、桜の散るのをおしむのは、日本語という文化体系にもとづくものである。「夕鶴」や「同期の桜」という語を外国語に訳すことはできるかもしれないが、それらの持っているイメージは伝わらないであろう。

《桜の花びら自体に特攻隊を作る力があるわけではない。万葉以来、日本の詩歌の中でイメージされてきたその言葉の伝統の中にこそ、その不思議な「力」があるのである。この伝統の外に生まれた人には、桜の散りゆく花びらに特別の美があることは見えはしないし、したがってその花びらに自己のアイデンティティを認めることもない。別の言葉でいえば、日本人は日本語の中に生まれるのであって、単に意志伝達の道具として日本語を学ぶのではないのである。われわれは自然界にある桜花の美がわかる前に、日本語の中にまず桜花の美を見るのだ。紀友則をはじめとする無数の詩歌の中に桜の散りゆく花びらの美をあらかじめ見ていたからこそ、自然の中にある山桜、つまり学名でいえばプルヌス・セルラタ・スポンタネア (*Prunus serrulata*, Lindl. subsp. *spontanea*, Ma-

kino) という植物を美しいと感じ、その散りゆく桜の花びらに感銘を受けるのである。もっとわかりやすく言えば、散りゆく桜の花びらが美しいから紀友則の歌に感銘を受けるのではなく、紀友則の歌を知っているからこそ、われわれには桜の散りゆく花びらが美しいのである。

このことは、国語というものは一つの世界観であると言ったヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言葉の正しさを証明するかのごとくである。一つの国語というのは、一つのものの見方である。桜の花の散るのを美しいとする見方は、日本語の持つ世界観なので、その日本語の中に生まれてきた人たち、つまりわれわれ日本人たちは、その日本語の世界観を受け入れて、桜の花の散るのを美しいと感ずるようになり、それに感動もするのである。かくして日本語は日本人の歴史を通じて日本人に支配的に働きかける力でもあるのである。

またフンボルトは各言語は、人間の住んでいる生活的世界、あるいは客観世界を「精神の私有財産に変える力をその中に持つ」というようなことも言っている。例の山桜であるが、これはプルヌス・セルラタ・スポンタネアと言っている限りは生活的世界・客観的世界にある自然物にすぎず、われわれの魂の外側にある自然物にすぎない。しかしこれを「やまざくら」と呼んだ瞬間に、それは日本人の精神的私有財産へと変質し、われわれの魂の内側とかかわり合いを持つのである。》(16-p. 195~197)

「夕鶴」という新造語を例にとろう。

《ところで、この「夕鶴」ということばは作者によって新らしく作られたことばで、この作品が発表されると、ユーズルという耳に感じる音としての美しさや、夕方、夕やけというイメージに鶴のイメージを重ねた、文字からくる美しさなどによって、あちらこちらでこのことばが使われはじめて、今ではまるで昔からあった日本語のように錯覚してしまうほどです。

国鉄常磐線を走っている上野・青森間の特急列車にも〈ゆうづる〉という名前がつけられていますが、雪国を走る列車にふさわしい名前として多くの人に親しまれています。

一面の雪の中にぽつんと一軒の小さなあばらや。家のうしろには、赤い赤い夕焼け空がいっぱいに―― (『夕鶴・彦市ばなし』新潮文庫)

というはじめのト書きから、私たちはまっ白な雪と、まっかな夕焼け空を感じるでしょう。このまっ白な雪の中から、まっかな夕焼け空へ飛び立っていく一羽の鶴の姿、それが「夕鶴」ということばに表わされていると思うのですが、それは主題である〈愛のけだかさ〉——この世界では決して実らないようなそれほど美しい愛の世界——を描いた作品の題としてもたいへん効果的だと思います。》(18-p. 196~197)

トーマス・クーンは学問マトリックス (disciplinary-matrix) なる概念によって科学者集団の構成を説明している。この中で新入科学者のための訓練は、学問マトリックスの四つの要素のうちの「記号の一般化」と「見本例」とによって進められてゆくという見解が示されている。この新入科



学者たちは訓練によって文字と実物とをむすびつける特定の型を身につけ、集団公認のその型によって自然を見てゆくことができるようになるのである。これは特定の文化を習得することである、といえる。

《科学の学生は、教科書の一章を読んでそれを完全に理解するが、しかし章末に付せられた多数の問題を解くには困難を感じるとよく言う。このような困難も、普通同じようにして解消される。つまり、学生は教師の手助けがあろうとなかろうと、その問題を彼がすでに出合った問題と同じようにみなす方法を見付ける。その類似点を認め、二つ、あるいはそれ以上の特徴的問題の間のアナロジーを捉えて、彼は記号を関係づけ、かつて有効であることを証明済みの方法でそれらを自然と結びつける。たとえば  $f=ma$  のような法則のスケッチは、一つの道具として機能し、学生にいかなる類似点を見付けるかを教え、見出さるべき状況のゲシュタルトの信号を発する。 $f=ma$  やその他の記号の一般化のように、さまざまな状況の間の類似点を見出す能力は、学生が例題をペンと鉛筆で、あるいは実験室の中で行なうことによって得られる主なものであると私は思う。個人によってそれぞれ異なるが、一定数の問題を済ませた後で、彼は、科学者として直面する状況を、彼の専門家グループの他のメンバーと同じゲシュタルトで見ることになる。》(19-p. 215~216)

#### V. 日本人の俳句による自然のとらえかたは、西洋流の自然科学のそれとは全くの異質ものである。

寺田寅彦の時代には、まだ「パターン認識」なる情報科学の概念は存在していなかったもので、下記の引用にはそのような表現は見あたらない。しかし、ここで寺田が言おうとしたのは、日本人の直観的パターン認識の体系がついに生み出したのが、俳句という一つの情報要約の形式であるということではなかろうか。

《日本において科学の発達がおくれた理由はいろいろあろうが、一つにはやはり日本人の以上述べきたったような自然観の特異性に連関しているのではないかとと思われる。雨のない砂漠の国では天文学は発達しやすいが、多雨の国ではそれが妨げられたということも考えられる。前にも述べたように自然の恵みが乏しい代わりに自然の暴威のゆるやかな国では自然を制御しようとする欲望が起りやすいということも考えられる。全く予測し難い地震台風に鞭打たれつづけている日本人はそれらの災害を軽減し回避する具体的方策の研究にその知恵を傾けたもののように思われる。おそらく日本の自然は西洋流の分析科学の生まれるためにはあまりに多彩でありあまりに無常であったかもしれないのである。

現在の意味での科学は存在しなかったとしても祖先から日本人の日常における自然との交渉は今の科学の目から見ても非常に合理的なものであるという事は、たとえば日本人の衣食住について前条で例示したようなものである。その合理性を「発見」し「証明」する役目が将来の科学者に残された仕事の分野ではないからという気もするのである。

ともかく日本で分析科学が発達しなかったのはやはり環境の支配によるものであって、日本人の頭脳の低級なためではないということはたしかであろうと思う。その証拠には日本古来の知恵を無視した科学が大恥をかいた例は数え切れないほどあるのである。

日本人の精神生活の諸現象の中で、何よりも明瞭に、日本の自然、日本人の自然観、あるいは、日本の自然と人とを引きくるめた一つの全機的な有機体の諸現象を要約し、またそれを支配する諸方則を記録したと見られるものは日本の文学や諸芸術であろう。》(15-p. 246)

《日本人の特異な自然観の特異性がある一方面に分化させ、その方向に異常な発達を遂げさせたものは一般民衆の間における俳諧発句の流行であったと思われる。》(15-p. 249)

## VI. 発想 (abduction) が成立する基礎となる自然観について

自然の斉一性と自然の一体性という二通りの観点がある。前者はエネルギー面から見た自然観であり、後者は情報面から見た自然観である。そして後者は日本人の持つ素朴な自然観や幼児の持つアニミズム的自然観と一致する。

幼児の世界観について、

《まず、幼児はアニミズムといわれるものの見方をもっている。アニミズムというのは、すべてのもの、動物や植物はいうまでもなく石ころのような無生物にいたるまで、人間と同じように心があり、生命があると考える見方である。幼児は、いろいろのものを自分と同じように考えて、話しかけたり、遊んだりする。これがアニミズムである。子どもが擬人化してすべてのものを見るといわれるのは、このアニミズムのあらわれである。》(20-p. 183)

市川亀久彌は等価変換的思考方法が成立する認識論的根拠を、エネルギー一般の動的形態の形式における共通性にもとめ、下記のごとく結論している。

《斯くの如くして、自然現象の発現形態は、必然的にエネルギーの運動形態一般がもつ本質的な共通性によって原則的な一致を示す。換言すれば、エネルギーの運動形態一般という抽象された本質にまで遡れば、自然は全く同一の存在形式をもつ。これが等価変換的思考方法成立の認識論的根拠である。》(21-p. 195～196)

有機体論的自然観は、今西錦司によって生態学における研究の展開として、フォン・ベルタランフによって理論生物学の立場から、牧島象二によって情報力学の観点から明らかにされている。

《その後世界の方々を訪れて、そこにもこれと同じような、自然に埋もれ、いわば半自然的生活を営んでいる、多くの人びとを見るにつれ、私の考えは次第に固まってきた。人間ははじめから自然に対置されるようなものではなくて、人間もはじめは、他のもろもろの生物と同じように、自然の

体系の中に編入されていたにちがいないという考えである。》(22-p. 24)

《そこで、もう一步進めて考えてみるのに、この体系化は、生物のいろいろな種が、お互いに無関係にできあがったのちに、お互いの間の調整をとる必要にせまられ、そこではじめて相互適応と、その結果としての体系化が現出した、というようなものではなくて、自然ははじめから一つの体系であり、その構成要素としての生物は、この体系を成り立たせるために、はじめから相互適応していた、と考えた方が、理解しやすいのである。そして、そういった体系が、みずからの自己運動として、生長し、充実していくところに、それを構成する生物の進化があった。》(22-p. 19)

《〔システム理論の側面の〕第三はシステム哲学がある。これは思考と世界観の改変であって、新しい科学的規範として（古典科学の分析的、機械論的、一方向因果関係的の規範に対して）「システム」を導入することから生じた結果である。展望をもった科学的理論はすべてそうだが、一般システム理論も「形而上学的」あるいは哲学的な側面をもっている。「システム」の概念はトーマス・クーンのいう新しい「パラダイム」、あるいは著者 (von Bertalanffy, 1967) の名づけた「新しい自然哲学」を構成するものであって、機械論的世界観のいう「自然の盲目的な法則」とか阿呆が物語るシェクスピア劇のような世界過程に対するに、「偉大なオーガニゼーションとしての世界」なる有機体論的展望をもってするものである。》(23-p. xv)

《天体が核反応による、地球内部が化学反応によるダイナミック・パターンの生物で、星の進化、宇宙の膨張、地震、火山活動等がみなその結果と解されます。このときは必ずサイクリックパターン (Cyclic Pattern) としての触媒がダイナミック・パターンの生物として参与していることを証明できますが、これらは後編で評論します。

不朽の名作といわれる芸術作品や定石と呼ばれる棋譜やその他の作戦、政治、経済、社会などのシステムも質的パターンとしての生命を持ち得ます。

また、定理、公式、不滅の論理、完成された理論体系なども生命を持つことになります。》(24-p. 74)

## VII. 発想の論理は演繹や帰納などの分析的論理に対して補完的な役割を持っている。

「これまでの論理が、《デイダクション》と《インダクション》を別々にあつかい、《アブダクション》を、ほとんど主題として取りあげることがなかつたのに対して、パースは、その実践的認識論の見地から、三つの論理過程の相互関連を明かにし、《デイダクション》や《インダクション》をばらばらに切りはなしてあつかう場合にあらわれる種々の難問を解決するいとぐちを与えたことは、論理学上きわめて重要な功績といえよう。」(25-p. 118)

《プラグマティズムの問題を、注意深く考察すれば、それが発想の論理 (the logic of abduction) の問題に外ならないことがわかるであろう。》(26-p. 121)

上山春平は今西錦司の思想を発想の論理との関連で下記のように評論している。

《ともあれ、演繹と帰納は、単純要素への分解と単純要素からの再構成の手続きを共通項としており、この共通の手続きは、「分析」とよばれている。したがって、演繹と帰納の論理をひっくるめて、分析的な論理とよぶことができる。これにたいして、今西さんが「新しい生物学の生命」とよぶ類推は、どうやら、分析の手続とは無縁であるらしい。それは、消極的に表現すれば、非分析的な論理であり、ほかの言い方をすれば、直観的な論理と言うことができよう。》(27-p. 184)

**VIII. 自然の特徴 (型) を見つけ出して短かい言葉で表現するという面では、俳句作りは自然からの情報の抽出であるといえる。自然界は型を多く提供することのできる豊庫といえる。**

NM 法ではT型展開のとき、アナロジーを自然界に求めるようにすすめている。

《アナロジーは自然界や人間界に求めるのがいい。アナロジーは、それについてそれからそれへとイメージがつながっているほうがいいので、そういうイメージは人造物、カタイものでは一般に少ないのである。たとえば「あそぶ」というキー・ワードから、「テレビ」などをアナロジーとして選ぶと、QBに対しては「スイッチを入れたら絵が出る」とか、「ブラウン管がある」「子供がはなれない」などというイメージしか出てこない。もっと豊富なイメージをテレビから得ようとするとき、それはそのブラウン管にあらわれる人物やお芝居のことになる。もちろん、そうしてわるいわけではないが、それらは、つまり自然物や人間なのであるから、はじめからそうしたほうがいいのである。》(28-p. 52~53)

俳句作りにおける観察力のはたらきについて寺田寅彦は述べている。

《俳句の修業はその過程としてまず自然に対する観察力の練磨を要求する。俳句をはじめるまではさっぱり気づかずにいた自然界の美しさがいったん俳句に入門するとまるで暗やみから一度に飛び出してでも来たかのように眼前に展開される。今までどうしてこれに気づかなかつたか不思議に思われるのである。これが作業の第一課である。しかし自然の美しさを観察し自覚しただけでは句はできない。次にはその眼前の景物の中からその焦点となり象徴となるべきものを選択し抽出することが必要である。これはもはや外側に向けた目だけではできない仕事である。自己と外界との有機的関係を内省することによって始めて可能になる。》

句の表現法は、言葉やてにはの問題ばかりでなくてやはり自然対自己の関係のいかなる面を抽出するかという選択法に係わるものである。

このような選択過程はもちろん作者が必ずしも意識して遂行するわけではないが、しかしそうい

う選択の能力は俳句の修業によって次第に熟達することのできる一種不思議な批判と認識の能力である。こういう能力の獲得が一人の人間の精神的所得として、そう安直な無価値なものであらうとは思われないのである。》(15-p. 287)

型把握の練習法について、その実際を板坂元は示している。

《さて、型把握の練習として、わたしは、子供たちに物真似をよくやらせる。物真似というのは、ある人の口ぐせや表情・身ぶりの特徴（型）を見つけて、それを再現する仕事である。別なことばでいえばある人から発せられるたくさんの情報の中から重要なものを選び出して、それを再生する作業だ。漫画の似顔画でいえば、人の特徴を見つけ出してそれを誇張して画く方法だが、この物真似がうまくできる子供は、大体において観察力が発達しており、耳・目・口の機能がすぐれている。子供はまわりの大人の真似て成長するものだが、意識的に物真似ができるようになるのは、やはり十歳を越えてからのようだ。

中学上級から高校生くらいになると、作家の名前をかくして、その文を読ませると、ある程度は作家名を当てられるようになる。音楽に興味のある子供なら、作曲家あてをやっても、かなり確実に当たるようになる。日常生活の中で、こういう練習は、いくらも見つけることができるものだ。

これまで、型把握という言葉を使ってきたが、これを法則性の発見といってもよいし、抽象化、一般化といってもよい。要するに帰納的な考え方の基本のことであって、好奇心を好奇心だけに終らせないためには、まずこのトレーニングを平生から心がけて実行する必要がある。頭のよしあしというものは、まず、この型把握の技術の上手下手の差によって決められることが多いし、それぞれの専門の道での才能のあるなしの差も、この技術の差による場合が多い。心がけひとつとまでは言えないけれども、心がけ次第では、相当に上達できるものだと、わたくしは思う。》(29-p. 28～29)

さらに型の端的な表現の練習についても述べている。

《簡単に言えばものの表面にあらわれた見えと、その背後や深層にかくれている要素（つまり形而上のもの）との関係、それが法則性をもっているかどうかを考え調べるのが、頭のはたらきの中でもっとも重要な部分、ということだ。したがって、頭をよくするためには、型把握のつぎにはこの関連づけに敏感になるような練習をすればよいわけである

(中略)

はたして、そうした練習法がありうるかどうか、わたくし自身も知らないが、子供たちにはアダナ法と称して一つの実験をやっている。まず、ものの形や色を「……のような形」「……のような色」というふうに言わせてみる。タバコの箱くらいの大きさ、牛のような犬、ピーナツバターのような色等々。まったくちがったものの間にも共通した性質があるという関連づけの練習だ。これを、さらに誰それに似ている人、ゴリラのような歩き方をする人という風に、少しずつ複雑にして行く。そして、おしまいにはアダナをつけさせる。つまり連想や比喩の練習だが、芝生に肥料をやるときには、芝がおなかを減らしているからご飯をあげるのだ、という擬人法まで含めると関連

づけの練習としては、なかなか効果があるように思う。

アダナは、型を把握した上で、それを短い言葉で描写する練習だから、自由な想像力を持っている子供たちは、大人よりも早く上達するものだ。こういう練習を通して具体的なものと抽象的なものとの関連づけの能力が発達すれば、子供でも相当に高度の知識、たとえば株式市場の構造とかトランジスターのはたらきとかを、小さいうちに理解できるようになる。》(29-p. 32~33)

KJ法では、対象が単位情報を担ったラベルの集まりとなっているが、そこから特徴を見つけ出して、短かい表現に要約するという点で、俳句作りとの類似性がみられる。

KJ法のA型図解のときの心がまえは下記の点である。

《要は集合のもとめている中核的ななにものかを、適切につかみとることである。べつの言葉でいえば、エッセンスをとらえた一行見出しをつくれということである。このためにも、表札はいたずらに既成の概念的な堅い用語にとらわれなくてもよい。むしろ表札は「ソフトで、しかもずばりと本質をついた」表現であってほしい。そのソフトさのなかに内容をなす紙きれたちのもともとの素材の土の香りを、まざまざと感じさせるようなものであればよい。こういった点からいって適切な表札とはまた、俳句の発句の精神のようなものであるという形容もできる。》(30-p. 68)

北川敏男は、情報学という観点を打ち出し、この観点からKJ法に考察を加えている。

《KJ法を整理してみると、情報学で問題にすべき点は次のことであろうかと思う。

- (1°) 言語情報としての単位情報への分割
- (2°) 単位情報の集合に対していろいろのグルーピングの実施
- (3°) このグルーピングに対してあたえる代表情報の決定
- (4°) 諸階層におけるグルーピングの導入
- (5°) 以上のグルーピングを一貫して流れる相接続した命題群の構成

まず第一に気付くことは、いずれにしても、言語情報をもとにしての(a)分類(b)併合(c)流線形成である。したがって、KJ法が方式化されるためには、言語情報の意味論的な考察が徹底的に行なわれなければならない。これについては、言語学の情報学的接近に期待すべきものが多い。

第二に注目すべきことは、しばらく言語情報なるものをカッコに入れて、(1°), (2°), (3°), (4°), (5°)の過程をシステム論的に見るとき、KJ法はいったい何を意図しているかということである。これについては、創造工学の開発者でありNM法の提唱者の中山正和氏の、KJ法に対する解釈が示唆的である。

わたし自身は、統計学における発想法の適用という観点から、かつて発想法に興味をもち、上述(1°)ないし(5°)の要約もそのとき得たものである。しかし情報の論理を本書の第I, II, III章という順序で追究してみたこの時点においては発想法の技法は情報の論理の用語のなかに<sup>は</sup>嵌めこんで理解することができるように思う。いま簡潔に要点をまとめてみよう。

- (i) 単位情報ごとに紙切れに切る…… (切断)
- (ii) 単位情報を一枚にする…… (自己保存)
- (iii) いくつかの単位情報をまとめる…… (部分集団)
- (iv) 大きないくつかの部分集団にわけ…… (階層化)
- (v) 諸階層の間のつながりを考える…… (システム化)
- (vi) 全体がつながるような文章化を考える…… (流れの導入)

ここで指摘したいことは、(1°) 一見混沌なものからいかにして秩序をきずきあげるかという方法として発想法をとらえること。》(1-p. 142~144)

### IX. 俳句の17文字は情報量からの必然性を持っている。

IX-1 一つの状況をひとつりもれなく記述できる最低音数は17音あたりであろう。

5W1Hを日本語で表現すると、

「だれが、いつ、どこで、なにを、なぜ、どうした。」と17音になる。実際にこれに具体的状況を示す語をあてはめてゆくと17音をはるかにこえる。筆者が考えた下記の文では16音でできているが、これは例外的ケースである。

《すがいまここでこぼれ、つよくにおう》

IX-2 十万分の一の確率のできごとまで考慮したときに必要な情報量は約17ビットである。

日常生活で起こりうることで、宝くじの当選は別として、確率が一万分の一以下の事態は無視しているのが、われわれの通常の考え方である。(31-p. 165) したがってある特定のことにについて知りたい場合、十万分の一の確率で起こる事態まで考えれば、十分すぎるほど十分である。

$$p = \frac{1}{10^5} \text{ とすると,}$$

$$-\log_2 p \doteq 16.6 \quad (\text{bit}) \text{ となる。}$$

したがって17ビットの情報があれば、日常生活では十分すぎるほど十分であるといえる。いいかえれば、わざわざ五十音を用いなくとも、17個の○か× (モールス符号でもよい) をならべるだけで、十分な情報を示すことができるといえる。

IX-3 法則性をつかむには、約17ビットの情報が必要である。

コンピューターとの「じゃんけん」の連続勝負をした場合、12~13回あたりになるとコンピューターの方が強くなるということである(島田俊秀助教授による)。「じゃんけん」11回目までの勝負でコンピューター側が得る情報量  $I$  は、

$$I = -\log_2 \left( \frac{1}{3} \right)^{11} \doteq 17.4 \quad (\text{bit})$$

となる。

したがって、(コンピューター側のプログラムの良し悪しにももちろん依存するが) 一応約 17 ビットの情報があれば、ランダム性からのずれとしての何らかの特徴をつかむことが可能といえる。

IX-4 断易において得られる平均情報量は約 17 ビットである。

直観的パターン認識の一つの方法ともいえる易について、情報量の計算をしてみよう。

本卦と之卦とがそれぞれ 6 ビットずつの情報量を持つので、完全に等確率で六十四卦が出現する場合には、両方あわせての情報量は 12 ビットとなる。

しかし、もう少し厳密に計算してみよう。

たとえば、擲銭法による場合各爻の出現確率  $p_i$  は、

$$\text{老陰 } p_1 = \frac{1}{8}, \quad \text{少陽 } p_2 = \frac{3}{8}, \quad \text{少陰 } p_3 = \frac{3}{8}, \quad \text{老陽 } p_4 = \frac{1}{8}$$

であるから、一つの爻の持つエントロピー  $H(\text{爻})$  は

$$H(\text{爻}) = \frac{1}{4} \sum_{i=1}^4 (-p_i \log p_i) = -\frac{2\left(\frac{1}{8} \log \frac{1}{8} + \frac{3}{8} \log \frac{3}{8}\right)}{4}$$

となる。

$$\text{これより, } \bar{p} = \frac{3}{16}$$

したがって一つの爻の持っている平均情報量  $I(\text{爻})$  は

$$I(\text{爻}) = -\log_2 \bar{p} \doteq 2.42 \quad (\text{bit})$$

となる。

よって一つの卦が持つ平均情報量は (之卦の分も含めて)、

$$I(\text{卦}) = 6I(\text{爻}) \doteq 14.5 \quad (\text{bit})$$

となる。

周易の場合はかなりのインスピレーションを加えて判断する必要がある。ところが断易では、かなり論理的に判断ができる。それは月と日とを考慮にいれるため、情報量加わるからである。このとき加わる情報量は、

月については、

$$I(\text{月}) = -\log_2 \frac{1}{12} \doteq 3.5 \quad (\text{bit})$$

日については、干と支とを考慮にいれるので、

$$I(\text{日干支}) = -\log_2 \frac{1}{60} \doteq 5.9 \quad (\text{bit})$$

となる。

しかし実際では旬空が最も重要な情報となることが多いので、



$$I(\text{旬空}) = -\log_2 \frac{2}{12} \doteq 2.5 \quad (\text{bit})$$

が加われば十分である。

したがって卦と当日の空亡の指定とをあわせた総情報量は、

$$I(\text{卦}) + I(\text{旬空}) \doteq 14.5 + 2.5 = 17.0 \quad (\text{bit})$$

となる。

すなわち断易は17ビットの情報生成する論理⊗直観体系であるといえる。この情報量は前項のそれと一致する。これは偶然の一致とみるよりも、経験的にリファインされていった結果、日常生活に必要な情報量を生成する体系が確立したとみる方が妥当であろう。俳句の17文字についてもこのように考えてよいであろう。

#### X. 俳句の人生（とくに死の問題）ではたす役割について

下記の牧島象二氏の論文からの引用は「未来を学ぶこと」（アンダーラインは引用者による追加）を「俳句を修業することにも」（引用者による追加）とおきかえても、十分に通用する。これは俳句のあつまったものが、「学ぶ最大の対象」と指摘された「質的システム」（32-p. 21）の一例をなしていることによる。

《教育制度の充実した社会では、前半の教育、すなわち「大人になったら、社会へ出たら、このようにせよ」という能力を与えることは行き届いている。しかし後半の「自ら学びとる」こと、特に「未来を学ぶ」方法については方法論もなく、その必要性すら認識が浅い。それだからこそ老年時代の索漠感や悲劇が絶えない。さらに人間にとって最後、最大、かつ永遠の未知——死——に対する心構えもおろそかになり勝ちである。さればこそ、個人にとっては、

一、創造の喜びと生甲斐を追求するため

二、「人生」という一連のドラマをすばらしい芸術品とするため

さらに社会、宇宙に生きる一員として

三、人類進化の一翼を担うため

四、人と自然の調和を高めるため

の仲介者として未来を学ぶことに（俳句を修業することにも）熱意を持ちたい。》（32-p. 16）

俳句修業による死の客観化について寺田寅彦は述べている。

《俳人のほうを聞いてみると自殺者はきわめてまれだという。もちろんこれは、<sup>きんしやう</sup>僅少な材料についての統計であるから、一般に適用される事かどうかはわからないが、上述のごとき和歌と俳句との自己に対する関係の相違を考え合わせてみるとおもしろい事実であろうかと思われる。いかなる非痛な境遇でもそれを客観した瞬間にはもはや自分の悲しみではない。》（15-p. 285）

俳句を追求することにより、高い思想的境地に達することが（ある場合には）できるようである。すなわち、「ある絶対者に帰依して解脱・救済を求め」ることも、「天皇・主君あるいは何らかの主義集団などのために没我的に献身しよう」ともしない、第三の思想的態度として、「無用の漂泊としての生に徹する立場」があると、死を直視できる思想者たち（芭蕉が含まれる）の存在を目崎徳衛は指摘している。

〔筆者註：上記三種の態度は、それぞれ岸本英夫が定義した、請願態、希求態、諦住態（33-p. 41）に対応するのではないかと思うが、本論には直接関係ないので、ここでは論じない。〕

《「何処から何処へ」とも見定めえない、はかない生の底には、暗い深淵がのぞいている。この深淵から眼をそらさずに、しかもなお祈ることもせず、またスクラムなどを組んで景気づけることをもせず、孤独と虚無に対決することは容易ではない。われわれは幸いにも日常の些事や、かりそめに設定し執着する目標に埋没することによって、深淵から眼をそらすことができる。現代のように、七十年代とか、二十一世紀とか、経済成長何パーセントとか、実に愚にもつかない二義的なものがかまびすしく騒ぎ立てられる場合には、そのかまけ方も極度となる。しかしいかなる多忙な健康人も、時におとずれる空白の時間に、否応なく実存に直面した体験を持たない人があるだろうか。人が「漂泊」のデモンの誘いを聴くのは、そのような時間においてであろう。

私が第三の類型というのは、いかなる既成の思想や信仰にも規制されない生の実相を、冷酷に凝視しようとした志向である。それは人生に目的や結論を性急に求めるのではなく、与えられた一日一日を味わい尽くし、歩き通そうとする立場である。》（34-p. 23）

学問の性質上特定の宗派にかたよることをさげなければならない立場にある宗教学者の一人が、自らの信仰体制を諦住態にまで高めたのは俳句によってではなかつたかと筆者は思う。

《人生をゆっくり深く味わう、しみりした人生を送りたい、四、五年前から父はそんな夢を持ちはじめていた。ふとすすめられて入った俳句の会は、父にこんな人生もあったのかという感を与えたらしく、父の生き方に一つの方向を指し示したようである。しば犬という号で、多忙な明け暮れに、ひよっと空いた時間ができると一生懸命ひねっていた。》（35-p. 209～210）

## XI. 発達段階と俳句のとりあつかいについて

有名な「俳句第二芸術論」に関しては、俳句の評価は不可能ではなく、分析批評の方法をもってすれば可能であるとして、この論の前提が反駁を受けている。（36-p. 246～249）

一方、その論の主旨は、俳句の芸術性の全面否定ではなく、無差別にどの作品をも芸術作品として認めようとした風潮への警告とみるべきだとの寺山修司の見解もある。（37-p. 157）

ただ大人の場合とちがいで子どもの定型短詩（俳句）の芸術性をどのように評価するか、また評価できるかどうかは、作品が少なくまだ実践例も少ないので、今後の課題として残る。〔ただし中学

生の作品について論じた例はある。(14-p. 255~257) 実践例がふえれば、子どもの作文や絵画その他の分野での教育的観点からの議論からも示唆をうけながら、上記の問題は解明されてゆくであろう。

指導上の留意点として、俳句にかぎっていえば、思考の発達段階からいって最低小学4年生、もう少しきびしくすれば、自殺の起る最低年令以上にならなければ、指導上文芸としての俳句を目ざすことは必要ないのではないかと筆者は思う。幼児および小学校低学年の児童の段階では、子ども自身に芸術性をめざして作品をみがかせることは考えず、すなおに発した作品がそのまま美しくひかっていることを目ざすのでよいと思う。

最後に、国語科教育の中で和歌や俳句が本格的にとりあげられない一つの大きい理由は、それらの定型性という点にあるとのことである。この問題については、国語科教育の専門家ではないし、事情やゆきさつをくわしく知らないので、機会をあらためて論じたいが、筆者としては、年月の試練にたえて残った型は、十分価値があるように思う。型から入り型を出るという点で、どの分野においてもまず最初に何らかの型を学ぶ必要がある。最初にどのような型を学べばよいかは、まさにこれから教科教育学が解明してゆかねばならない問題である。

## 謝 辞

国語科教育における俳句のとりあつかいの現状については蓑手重則教授、田中道雄助教授に御教示をたまわった。また英語科教育の小篠敏明助教授からは、言語教育に関するいくつかの指摘をいただいた。ここに記して謝意を表する。

## 文 献

- 1) 北川敏男「情報学の論理」昭和44年9月刊(講談社)
- 2) 文部省「小学校学習指導要領」昭和43年7月刊(大蔵省印刷局)
- 3) 文部省「中学校学習指導要領」昭和44年5月刊(大蔵省印刷局)
- 4) 内海巖他「社会認識教育の理論と実践」昭和46年12月刊(葵書房)
- 5) 教育調査研究所「新教育用語事典」昭和46年4月刊(教育出版)
- 6) 梅棹忠夫「知的生産の技術」昭和44年7月刊(岩波書店)
- 7) 牧島象二「パターンダイナミックスへの招待」野口研究所時報第17号、昭和46年3月刊(同研究所)
- 8) S. T. エムレン「星で定位をする渡り鳥」サイエンス Vol. 5 No. 10, 昭和50年10月刊(日本経済新聞社)
- 9) 野崎 弘「物質情報論とその応用」昭和49年3月刊(総合科学出版)
- 10) 松下恭子「子どものモスクワ」昭和47年6月刊(岩波書店)
- 11) 松根東洋城「小学校・補習学校教科書所載俳句評釈」; 山本三生「続俳句講座第3巻」昭和9年9月刊(改造社)
- 12) 鈴木慎一「幼児の才能教育」昭和46年1月刊(明治図書)
- 13) 鈴木慎一「才能開発の実際」昭和46年8月刊(主婦の友社)
- 14) 栗山理一「俳句の批判」昭和30年3月刊(至文堂)
- 15) 寺田寅彦「寺田寅彦随筆集 第5巻」昭和38年6月刊(岩波書店)
- 16) 渡辺昇一「日本語のこころ」昭和49年10月刊(講談社)
- 17) 鈴木孝夫「ことばと文化」昭和48年5月刊(岩波書店)
- 18) 井関義久「批評の文法」昭和47年4月刊(大修館書店)
- 19) トーマス・クーン「科学革命の構造」昭和46年3月刊(みすず書房)

- 20) 山下俊郎「幼児心理学」昭和46年6月刊(朝倉書店)
- 21) 市川亀久彌「独創的研究の方法論」昭和35年11月刊(三和書房)
- 22) 今西錦司「私の自然観」昭和41年6月刊(筑摩書房)
- 23) フォン・ベルタランフィ「一般システム理論」昭和48年7月刊(みすず書房)
- 24) 牧島象二「パターンダイナミックス」野口研究所時報第17号, 昭和46年3月刊(同研究所)
- 25) 上山春平「弁証法の系譜」昭和38年6月刊(未来社)
- 26) Charles Sanders Peirce: "Pragmatism and Pragmaticism", (1965) Harvard University Press.
- 27) 今西錦司「生物の世界」昭和47年1月刊(講談社)
- 28) 中山正和「創造工学序説」昭和47年9月刊(産業能率短期大学出版部)
- 29) 板坂元「考える技術・書く技術」昭和48年8月刊(講談社)
- 30) 川喜田二郎「続・発想法」昭和45年2月刊(中央公論社)
- 31) D. A. Gillies: "An Objective Theory of Probability" (1973) Methuen & Co Ltd.
- 32) 牧島象二「未来を学ぶ」; 林雄二郎他「情報化社会シリーズ6 学ぶ」昭和45年10月刊(毎日新聞社)
- 33) 岸本英夫「宗教学」昭和36年6月刊(大明堂)
- 34) 目崎徳衛「漂泊」昭和50年4月刊(角川書店)
- 35) 岸本英夫「死を見つめる心」昭和48年3月刊(講談社)
- 36) 川崎孝彦「分析批評入門」昭和49年6月刊(至文堂)
- 37) 寺山修司「戦後詩」昭和40年11月刊(紀伊國屋書店)